英語科授業での協同的学びの質を高めるための考察と実践

A research and a presentation of practices by which we can improve the quality of collaborative learning in English education

根　岸　恒　雄*
Tsuneo NEGISHI

【キーワード】協同学習、英語教育の目的、協同的学びを成立させる３要件、学びの質、具体的実践例

第１章　協同的学びの質を高めるための考察

１　はじめに

（１）協同的学び（協同学習）への関心が高まっている。一方的な知識伝達型の一斉授業だけでは生徒全員を学びに参加させることができないことが実践的に証明されてきていることの表れであろう。そのことは文部科学省がアクティブラーニングの必要性を言い出していることからも明らかである。

（２）日本の公立学校において協同学習が広まる大きな原動力の一つとなっているのが、学校全体で協同学習を推進し、授業改革を基に学校を改革することを目指す学びの共同体づくりの広がりであろう。筆者は２つの公立中学校において合計7年間学びの共同体づくりに取り組み、協同学習を全校で進めることの意義や効果を強く実感してきた。

中学校の英語科教師として協同的学びの実現を目指して実践し、実践報告をさせてもらう機会も多く得てきた。また研究会等で他の英語教師の授業も参観し、協議にも参加してきた。研究会においてよく言われることが、「協同学習でとても難しいのが英語だ」ということ、また「英語の授業で質の高い学びを実現するにはどうしたら良いか」ということである。

（３）「学びの質を高める」という課題は英語科教育だけに求められているわけではない。「２１世紀型の学校教育」として、全ての教科に求められている。ここでは英語科授業での協同的学びをどう進めたら良いかにも触れながら、特にその質を高めるにはどうしたら良いか、そのための考察を行い、自身の実践も紹介してみたい。

２　協同学習の定義とグループ学習の３類型

まず、協同学習について定義し、3種類のグループ学習について確認しておきたい。

（１）協同学習の定義について江利川（2012）は、「少人数集団で自分と仲間の学びを最大限に高め合い、全員の学力と人間関係力を育て合う教育の原理と方法」と述べている[1)]。実際の授業を実施する場合、少人数集団だけで行うわけ　ではないので、実践の目安として根岸（2013）は、「英語教育の効果（人格形成や学力形成）を最大限に高めるために、全体での授業とペア・グループの活動や学び合いを有効に組み合わせて授業を行う」を提起している[2)]。教師が説明をしたりトレーニングをさせたりする一斉の部分と、ペアやグループ（4人程度）の活動や学び合いを組み合わせて教育の効果を高めると考えると取り組みやすいであろう。

（２）本稿で論ずる協同学習の種類についても触れておきたい。佐藤（2014）は、日本におけるグループ学習には３つの類型があるとしている[3)]。「①班学習と呼ばれる『集団学習』＝集団主義(Collectivism＝集産主義)の伝統。(1930年代から1960年代)。② 協力学習（Cooperative learning）による『話し合い』学習。アメリカでも日本でも最も普及している（Johnson & Johnson, Slavin）。③ 協同的学び（Collaborative learning）(Vygotsky, Dewey)。学びの共同体における協同的学びは、 ヴィゴツキーの発達最近接領域の理論と、デューイの民主主義と対話的コミュニ ケーションの理論を基礎としている」。

本稿で協同学習と言う場合、学びの共同体における協同学習（Collaborative learning）を中心に論じている。また筆者自身、この協同学習はネル・ノディングズが言うケアの論理も根拠にしているように思っている[4)]。ノディングズはケアを「心を砕く」という意味で使っている。教師がすべての生徒に心を砕き、それを基盤にしながら生徒同士が心を砕き合う関係を作るということである。

＊　埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター研究員

3　英語教育の目的を考える

協同学習実践の目安に関係して、筆者は英語教育の効果を人格形成や学力形成と書いた。ここで英語教育の目的について考えたい。目的をしっかりと把握して実践することが、授業の質を考える上でも大事になるからである。

（1）筆者は英語教育の目的は、2つが中心だと考えている。

①英語教育を通して、人格形成を進めること。言語の背景にある世界の文化や生活、起こっていること等を学びながら、世界の人々と共生し、力を合わせて諸課題を解決していける人間に育てること。

②英語教育を通して、学力形成を進めること。4技能の力を高め、英語を使える力を高めていく。また外国語と対比しながら母語である日本語への認識を深める。

毎時間2つの目的を同じように追求するわけではない。教材等により違いは起きるであろう。大事なことは、英語教育の長いスパンの中で2つを追求するということである。

（2）この目的論の根拠をあげてみたい。中学校学習指導要領では次のようになっている[5]。

> **（1）第1章　総則（第1　教育課程編成の一般方針）**
> ・公共の精神を尊び，民主的な社会及び国家の発展に努め，他国を尊重し，国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献し未来を拓（ひら）く主体性のある日本人を育成するため，その基盤としての道徳性を養うことを目標とする。（学校の教育活動全体を通して行うと強調）
> **（2）第2章　各教科　第9節　外国語**
> ・外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。
> ＊下線部は筆者による

人格形成にかかわる道徳性を養うことを学校の教育活動全体を通じて行うとし、道徳の時間はもとより，各教科，総合的な学習の時間及び特別活動において指導を行わなければならないとしている。英語科では第2章のみが強調される傾向にあるが、人格形成と学力形成の両方を追求すべきとしているのが学習指導要領の趣旨なのであり、英語を含むすべての教科に共通するものなのである。

（2）1965年のユネスコ公教育会議が、各国文部省に勧告した「中等学校の外国語教育に関する勧告59号」は次のように述べている[6]。

> （9）外国語教育はそれ自身が目的でなく、その文化的、人間的側面で、学習者の知性と人格を鍛え、よりよい国際理解と、市民間の平和的で友好的な協力関係の確立に貢献することに役立つべきである。

ここでも、公教育における外国語教育の目的が、外国語技能の習得にとどまらず、学習者の知性と人格を鍛えることに役立つべきとしている。

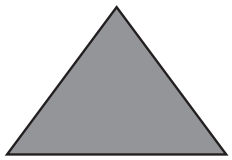
（3）1962年に日本教職員組合の全国教育研究集会（全国教研）の外国語教育分科会の討議の中で決められた「外国語教育の4目的」についても考えてみたい。当時ほとんどの教員は組合に入っていたので、この分科会は全国の英語教員の代表が集まり、実践を交流し課題を確認し合う重要な場であった。そこで決められた「4目的」はその後、1970年と2001年に改訂され、21世紀にふさわしい「外国語教育の4目的」として現在に引き継がれている。

> **【外国語教育の四目的】（第3次）**
> 1　外国語の学習をとおして、世界平和、民族共生、民主主義、人権擁護、環境保護のために、世界の人びととの理解、交流、連帯を進める。
> 2　労働と生活を基礎として、外国語の学習で養うことができる思考や感性を育てる。
> 3　外国語と日本語とを比較して、日本語への認識を深める。
> 4　以上をふまえながら、外国語を使う能力の基礎を養う。

以上のように、中学校での外国語教育のあり方を示す3つの文書とも、外国語（英語）教育を通して人格形成と学力形成の両面を追求すべきことを強調している。このことは後に見る英語教育の教材の中身や、授業の質を考える上でも大変重要な意味を持ってくることを指摘しておきたい。

4　協同的学びを成立させる3要件とその具体化

協同学習の効果的実践や学びの質を考える上で大切なのが佐藤（2014）の言う「協同的学びを成立させる3要件」である[7]。

> **【協同的学びが成立する3要件】**
> 真正の学び(authentic learning)
> ＝教科の本質に即した学び
>
> 
>
> 聴き合う関係　　ジャンプのある学び
> （学び合う関係）

この3要件がそろってこそ協同的学びが成立するとしている。協同的学びを成立させ、その質を高めるためには、これら3要素を具体化し高度化することが大切だと考える。各要素を英語科としてどう具体化するか、筆者の考えを示してみたい。

（1）聴き合う関係（学び合う関係）づくり

聴き合う関係づくりでは、次の諸点が大切になるだろう。

①　教師は全体での授業とペア・グループの活動や学び合いを有効に組み合わせて授業を行うようにする。生徒は一緒に取り組む中で、ペアやグループの仲間

のことを理解し、互いに気遣う（ケアし合う）ことができるようになっていく。

② １つの教科で実施しても関係はできるが、すべての教科で行われる方がずっと効果が高い。聴き合う関係づくりは人間関係づくりでもある。全校で取り組んでこそ、人間関係づくりが進むのである。

③ 「教え合う」のではなく、「学び合う」ことが大切。「わかった人は教えてあげて」ではなく、「わからなかったら自分から聞くんだよ」としつけることが必要である。わからない子ほど自分から聞けない傾向があるので、そんな場合には「共感的な声かけができる関係」[8]（胡子、2015）が必要になるだろう。

④ 協同学習を進める前提として、ペア、４人グループを作っておくことが必要である。スムースに一斉からペアやグループに、またその逆にも移行できなければならない。

（2）英語科としての真正の学び

協同的学びの効果や質に関係する大きな要素が英語科としての真正の学び（教科の本質に即した学び）であろう。次の諸点を考慮することが重要だと考える。

① 英語教育の目的をふまえる（目的論）。教育の長いスパンの中で、また短期の授業の中で、人格形成と学力形成の両立を目的として授業を構成することである。技能を高めることを目標とするのは当然であるが、それだけでは公教育とは言い難いであろう。

② 目的論をふまえ、学ぶに値する内容のある教材を使用する（教材論）。学習指導要領総則でも言われている趣旨を生かし、国際理解、平和、環境、人権、愛、努力等を扱う質の良い教材を使い、協同学習的に学ばせる方法を工夫したい。また、ここで言うauthentic（真正な）とは、教科（英語科）としての真正性であり、必ずしも教材の真正性（原物に忠実な）を意味するものではないと考える。

③ 英語教育の方法を学び熟練する（方法論）。生徒同士の学び合う関係ができただけでは、協同的学びが効果をあげるとは限らない。英語教育としての理論や実践方法をどれだけ学び熟練しているかが問われることになる。協同的に学ばせる力と教科教育の力が両輪のように高まってこそ、質の高い授業ができると言っても過言ではないだろう。

④ 英語科は学力差が一番つきやすい教科であることにも考慮が必要である。そのために、共有の課題を丁寧に扱うこと、また支え合って学ばせる工夫が大切である。

⑤ 英語科は活動やトレーニングを多く伴う教科であるため、どのペアやグループも有効に機能することが望ましい。活動に参加できないペアやグループが生じることがクラス全体に与える影響は、探究を中心とする教科以上に大きいと言えるのではないか。そのため、ペア・グループの編成に工夫を加えても良いだろう。

⑥ 英語科でのペア、グループの組み方については、主に３通りの方法が考えられるであろう。江利川（2012）で筆者が紹介した方法を簡潔に記しておきたい[9]。

【グループ編成の主な方法】

男女混合の4人グループを作ることは前提で、

A　教師が学力や人間関係を考え、多様なメンバーを入れて編成する方法。

B　近くに座っている4人ずつで教師がグループを作っていく方法。筆者自身はこの方法を使い、必要に応じて生徒の同意を得た上でメンバーを替えることがあった。またグループのまとめ役として、班長を決めていた。

C　クラス全体をペアリーダーとパートナーに分けて、人間関係を把握した上で教師がペアを作り、２つのペアを組み合わせて4人グループを作る方法。

それぞれの利点、欠点、その他詳しい情報については元の文を参照され、継続でき協同的学びを効果的に実現できる方法を工夫されたい。

（3）英語科でのジャンプのある学び

① 教科書レベルの課題を共有の課題というのに対して、教科書以上の高いレベルの課題のことをジャンプの課題と一般的に言っている。

③ 英語科でのジャンプの課題は、一人では到達しにくいが、仲間と支え合って初めて実現できる課題を設定し、そこに向けて協力して達成を目指すのが望ましい。吉田（2015）は8，9割の生徒が英語嫌いで入学してくる高校で、1年生から協同学習を続け、グループリテリングを積み上げた上で、2年生の3学期に個人リテリングに挑戦させている[10]。高めの課題を設定し、グループでの何度もの練習を足場にし、最後は個人で挑ませている。高めの課題でも、協同的に学ばせ細かな手立てを尽くせば、達成可能なことを明らかにしている。

④ 胡子の「学びのスパイラル」もジャンプの課題の重要性を示している[11]。

Output（表現）させる課題 →Noticing（気づき）→ Research（情報収集）→Intake（分析・整理）→ ☆ Output（判断・表現）☆ → 次の活動 というスパイラル（らせん状）な高まりの実践を紹介している。☆印部分にはジャンプの学びが入る。Outputという課題から入り、途中にジャンプすべき場面があるから、NoticingやResearch、Intakeが必要になってくる。そうした活動の繰り返しにより高い英語力につなげている。胡子は、Learning is jumping! とまとめている。

⑤　学力差が一番つきやすい教科だけに難しさだけを追求し続けるのは「落とし穴」にもなり得る。まず共有の課題を丁寧に扱い、必要な活動を積み上げること、その上で支え合いながら（模倣や足場かけ等も使いながら）高い課題に挑戦させることが必要である。

⑥　「個人学習の協同化」（個人でやっても良い課題を、グループを作り聴き合いながら実施させる）も有効である。例えば、自己表現（課題作文）を書かせる時にもグループを作って、聴き合ってやらせると、ほぼ全員が書けるようになる。

⑦　高い課題があってこそ、生徒達は本気になるし、生徒同士も力を合わせ、繋がっていくことも付け加えておきたい。

5　考察のまとめと今後の課題

（1）以上、協同的学びの成立する要件と学びの質を高めるための考察を行ってきた。重要な点をまとめてみたい。

①質の高い学びという場合に、「２１世紀型の学校教育」を視野に入れるべきこと。
②英語教育を通して、人格形成と学力形成の両方を進めるべきこと。
③人格形成と学力形成の両方が進められるよう、教材の質が問われるべきこと。
④協同的学びの質を高めるためには、成立のための３要件（聴き合う関係、教科の本質に即した学び、ジャンプのある学び）を具体化し、さらに高めることが大切であること。
⑤聴き合う関係づくりのために、学び合う関係づくりが大切であること。全体での授業とペア・グループの活動や学び合いを有効に組み合わせ、継続していく中でつくられていくこと。
⑥教科の本質に即した学びのためには、目的論、教材論をふまえ、方法論にも熟達することが大切であること。
⑦ジャンプのある学びを追求してこそ、生徒を本気にさせ、力を伸ばすことができること。

上記のことに留意して実践を具体化できてこそ、協同的学びの質を高めることができるのではないだろうか。

（2）今回は協同的学びの成立する要件や学びの質を高めるための手立てを検討してきた。今後は協同的学びの効果や方法を考察していきたい。

コの字型での授業の一場面

第２章　学びの質を高めることを目指した実践

第２章では、筆者自身が実践してきた中からいくつかを紹介し、英語科での協同的学びの質という視点から検討して頂きたい。

1　授業方針

筆者の授業方針は次のようである。

（1）目標は「人間教育としての“英語楽習”」
楽しく学ばせる中で、人格と学力の形成をめざす。
①コミュニケーション力を高める。その中身が大切！
②２１世紀型の教育をめざし、世界の人々と平和的に力を合わせ、諸課題を解決できる人格と学力を育てる。
（2）授業方針
①わかる、楽しい、仲間と、表現できる。
②世界と出会う：交流、環境、平和、愛、人権、努力等。
③豊かな活動と価値ある学び。
④生徒をつなげ、生徒とつながる。

2　具体的実践例

授業はコの字型の座席での一斉授業とペア、グループ学習を有効に組み合わせて行うように務めている。

A 教科書の基本文（文法学習）では

教科の基本文（文法学習）では、次のような学習形態をとるのが通常のやり方である。

（1）オーラルでの文の導入、説明は一斉で。
（2）新文法事項を使った対話やＱ＆Ａなどはペアで。
（3）問題や自己表現（作文）はグループを作って。グループの全員が終わったら班長が報告。単語練習や別の課題をやる。
（4）コの字に戻し、答の確認、説明、自己表現の発表等を行う。

この方式での導入の一例を示したい。Sunshineの教科書Program5-2「 make 人　形容詞」の文の導入の様子である。

（1）教師が一定のまとまった話をし、その中で「自分を幸せにするもの」の文を紹介する。ここでは、Listening to music makes me happy. 等の文を紹介する。
（2）プロジェクターでその文を示しながら、文の使い方を説明し、主語や形容詞の部分を他の語に変えながら、パターン・プラクティスを行う。
（3）プリント（次ページ）を使い、２のWhat makes you happy?の質問に対する自分の答えを書かせる。その時に、参考になるように、プリントの例を全員で学ぶ。（ここまでコの字で）
（4）〖 プリントに書いた自分の文と３の例文を参照し、

インタビュー・ゲームを行う（ペア活動）。相手の名前と「幸せにするもの」を記入する。2分半程度の時間で何人とインタビューできるか。1人につき、1ポイントとなる。

（５）4人グループを作り、インタビュー結果を基に４の作文を書く。わからない表現は辞書を引いたり、友達に聞いたりして、全員が3文以上書けたら班長は教師に報告する。

（６）終わったグループは５の作文を書き、その後、プリント裏側の単語練習を行う。

（７）時間があれば、４で書いた文を発表してもらう。

３年＿＿組＿＿番　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

P. 5－2　make　A　B「AをBにする」（Bには形容詞が入る）

1．Do you like listening to music?

Yes.　Listening to music **makes me happy**.

（音楽を聞くことは私を嬉しくさせる　→　音楽を聞くと私は嬉しくなる）

Playing soccer **makes me happy**.

【形容詞のいろいろ】

happy: 嬉しい　angry: 怒っている　excited: わくわくした　surprised: 驚いた

sad: 悲しい　popular: 人気のある

2．自分の立場で答えよう。

A: What makes you happy?

B: ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ makes me happy.

watching movies:映画を見ること　playing games:ゲームをすること　cooking:料理すること　reading books:読書　fishing:釣り　swimming:水泳　playing tennis: テニスをすること　sleeping:眠ること　singing songs: 歌を歌うこと　watching TV:テレビを見ること　climbing mountains:山登り　talking with my friends:友達と話すこと　staying with my family:家族と一緒にいること

3．お互いに聞き合おう。

A: Hi.　Listening to music **makes me happy**.　（音楽を聴くと私は幸せになるの）

What **makes you happy?**　（何が君を幸せにするの？）

B: Playing soccer **makes me happy**.　（サッカーをすると僕は幸せになるよ）

A: I see. Thank you.

B: You're welcome.

Name					
幸せにするもの					
Name					
幸せにするもの					

4．例にならって上で聞いた事を英文にしよう。

例）Climbing mountains makes Mr. Negishi happy.　山に登ると根岸先生は幸せになります。

Reading books makes Keiko happy.　読書をすると恵子さんは楽しくなります。

①＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

②＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

③＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

5．次の英文を完成させよう。

① この歌は私を楽しくします。（me, this, happy, makes, song）.

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

② サッカーの試合を見ると私たちはわくわくします。（soccer, us, watching, games, makes, excited）.

＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

B 単語や本文の学習では

単語や本文の学習形態も基本文とほぼ同様である。

（１）単語の学習、本文導入、リーディング等はコの字。
（２）読み取り、英問英答、リスニング等はグループで。
（３）本文説明、問題の答え合わせ等はコの字。
（４）リピーティング、シャドウイング等はコの字。
　グループ合わせ読み、一文ずつ回し読みも行う。
（５）ペア読み、ペアで同時通訳方式読み等はペアで。
　単語インプット等もペアで。

C ウォーム・アップ、小テスト、長文読み取り等

（１）ウォーム・アップの活動
①ビンゴゲームはコの字で。
②スマイル・インプットはペアで。
③日常会話（Power Up English）はペアで。
④歌は全員で立って歌う。
（２）単語テストや小テストはペアで採点し、グループごとに記録して、提出する。
（３）長文や感動教材の読み取り、入試問題等は、（個人→）グループ→全体でやると有効。

D 英語の歌の学習と鑑賞を行う

筆者が歌導入の方法として使っているReading-Listening方式では、歌の導入でグループを活用し、学習に全員を参加させ、その歌の鑑賞まで行えると考えている。以下がその方法である。

【Reading-Listening方式の手順】

①その歌や歌手についての説明を２分程度で行う。
②歌詞プリントの単語の中から１０～１５個程を空欄にして番号をつける。８割程度を既習の語、２割程度を未習の語にしておくと、「達成感」と「挑戦心」を養えるように思う。
③グループを作らせ、英語の歌詞と和訳を読んで空欄に入る単語を入れさせる。生徒は英文と日本文を一生懸命読み、歌のメッセージを読み取るとともに、（　　）に入る語について相談することができる。辞書を使わせる。この時正しく書けた単語は一つにつき２ポイントになる。時間内に終わったグループは一緒に音読（合わせ読み）をする。（Reading: １５分程）
④グループを作ったまま、ＣＤを聞いて空欄に書いた語の確認をする。すでに書けている場合には聞いて確認。聞いて初めて書けた場合には単語一つにつき、１ポイントになる。（Listening: ５分間）
⑤一斉授業の隊形（コの字型）に戻し、空欄に入る語を発表してもらい確認しながら、必要な解説を加え語法や詩の内容が理解できるようにする。（８～１３分程）
⑥もう一度曲をかけ、自分が最も感銘を受けたり、共感する文や表現に下線を引きながら聞かせる。後でそれらを交流するためである。
⑧感銘を受け、共感する文や表現を発表してもらい、交流しながら詞の解釈を深めていく。（５～８分程）
⑨必要に応じ歌の感想を書いてもらう。（２分程）

Readingに励む生徒達

【Zero Landmine（地雷廃絶を願う歌）を学んだ実践】

２０１３年1月、２年生で行った実践である。

（１）予備学習としての地雷の話

前の時間の授業終わり10分程を使って、地雷や被害にあった人、子供たちの写真を見せながら、被害の実態、現在地球に埋められている数（7000万個～１億個と言われている）、除去の方法等を話した。本番ですぐに歌の学習に入れるようにするためである。

（２）授業本番

次の授業デザインを立てて実施した。

Zero Landmine導入の授業デザイン

1　内容　　歌「Zero Landmineの学習と鑑賞」

2　本時のねらい

（１）歌で使われている単語や表現を理解させる。

（２）深い内容を表す箇所を考えさせ、交流し、鑑賞させる。

（３）「学び合い学習」を促進し、全生徒の授業参加をめざす。

3　授業の流れ

（１）授業の流れについての説明　　コの字

（２）Reading（英文と訳を読み比べ、英文の穴埋め）　　グループ

（３）Listening（ＣＤを聞いて確認する）　グループ

（４）答の確認、重要表現の確認　　コの字

（５）もう一度Listening（最も感銘を受ける箇所はどこか考えながら聞く、交流）　　グループ

（６）全体での交流　　コの字

（７）歌と坂本氏の活動に対する感想記入　　個人

4　授業評価のポイント

（１）単語や表現は理解できたか？

（２）感銘を受ける箇所について考え、深められたか？

（３）歌と坂本氏らの活動について考えを書けたか？

３の（４）では答と重要表現の確認をしながら、文の解釈も行った。例として、

There's fire in the ground　　fireとは何のこと？

In the space between the trees　In the forests and fields　　fieldsの意味は？

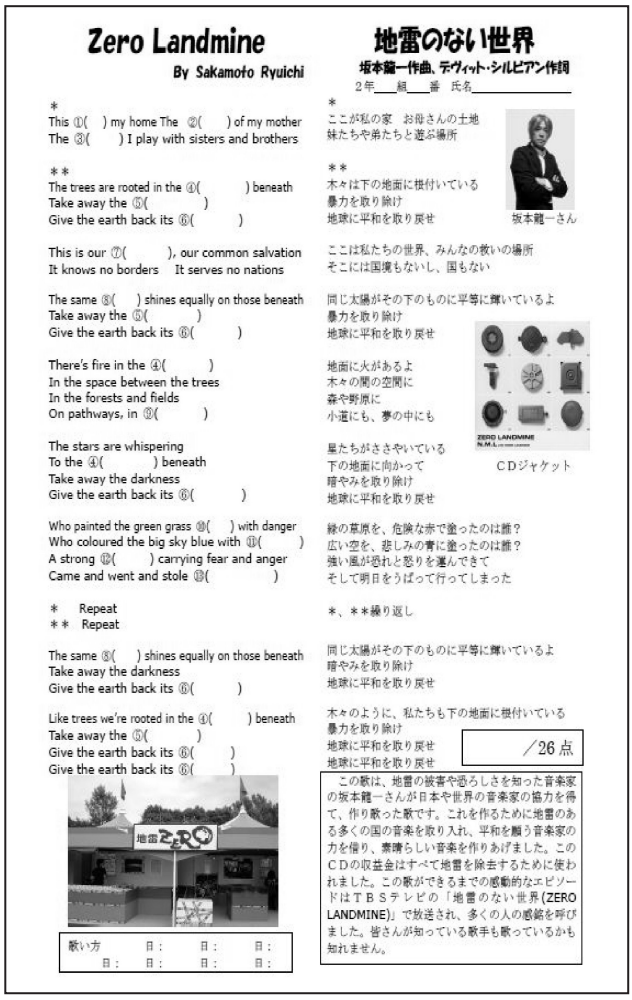
野原にあるというのはどういうこと？

On pathways, in dreams　　小路や夢の中にもあるというのは？

A strong wind carrying fear and anger

Came and went and stole tomorrow

stole tomorrowとは



Zero Landmine

By Sakamoto Ryuichi

地雷のない世界

坂本龍一作曲、デヴィット・シルビアン作詞

2年___組___番　氏名_____

＊

This ①(　) my home The　②(　) of my mother

The ③(　) I play with sisters and brothers

＊＊

The trees are rooted in the ④(　) beneath

Take away the ⑤(　)

Give the earth back its ⑥(　)

This is our ⑦(　), our common salvation

It knows no borders　It serves no nations

The same ⑧(　) shines equally on those beneath

Take away the ⑤(　)

Give the earth back its ⑥(　)

There's fire in the ④(　)

In the space between the trees

In the forests and fields

On pathways, in ⑨(　)

The stars are whispering

To the ④(　) beneath

Take away the darkness

Give the earth back its ⑥(　)

Who painted the green grass ⑩(　) with danger

Who coloured the big sky blue with ⑪(　)

A strong ⑫(　) carrying fear and anger

Came and went and stole ⑬(　)

＊　Repeat

＊＊　Repeat

The same ⑧(　) shines equally on those beneath

Take away the darkness

Give the earth back its ⑥(　)

Like trees we're rooted in the ④(　) beneath

Take away the ⑤(　)

Give the earth back its ⑥(　)

Give the earth back its ⑥(　)

歌い方　日：　日：　日：

日：　日：　日：　日：

＊

ここが私の家　お母さんの土地

妹たちや弟たちと遊ぶ場所

＊＊

木々は下の地面に根付いている

暴力を取り除け

地球に平和を取り戻せ

坂本龍一さん

ここは私たちの世界、みんなの救いの場所

そこには国境もないし、国もない

同じ太陽がその下のものに平等に輝いているよ

暴力を取り除け

地球に平和を取り戻せ

地面に火があるよ

木々の関の空間に

森や野原に

小道にも、夢の中にも

星たちがささやいている

下の地面に向かって

暗やみを取り除け

地球に平和を取り戻せ

ＣＤジャケット

緑の草原を、危険な赤で塗ったのは誰？

広い空を、悲しみの青に塗ったのは誰？

強い風が恐れと怒りを運んできて

そして明日をうばって行ってしまった

＊、＊＊繰り返し

同じ太陽がその下のものに平等に輝いているよ

暗やみを取り除け

地球に平和を取り戻せ

木々のように、私たちも下の地面に根付いている

暴力を取り除け

地球に平和を取り戻せ

地球に平和を取り戻せ

／26点

この歌は、地雷の被害や恐ろしさを知った音楽家の坂本龍一さんが日本や世界の音楽家の協力を得て、作り歌った歌です。これを作るために地雷のある多くの国の音楽を取り入れ、平和を願う音楽家の力を借り、素晴らしい音楽を作りあげました。このＣＤの収益金はすべて地雷を除去するために使われました。この歌ができるまでの感動的なエピソードはＴＢＳテレビの「地雷のない世界(ZERO LANDMINE)」で放送され、多くの人の感銘を呼びました。皆さんが知っている歌手も歌っているかも知れません。

Zero Landmineの歌詞プリント

（６）の「最も感銘を受ける部分とその理由の交流では、6人の生徒が発表した。

（７）の歌の感想と坂本氏の活動に対する感想の中から紹介する。

この歌についての感想
I think this song is very wonderful. This song is important. I think this feeling is important. (E君)
I think this song is a great song. I think Mr. Sakamoto is great. The most impressive part to me is Give the earth back its peace.　　(Y君)

I think Mr. Sakamoto is great. I will cheer Mr. Sakamoto. （E君）
坂本さんの活動への意見
I agree with Mr. Sakamoto. I think that Mr. Sakamoto's idea is nice. I want to clear landmines to help people. （K君）
I think Mr. Sakamoto is very wonderful. We should act like him. His activities will extend to the world. （Sさん）
I think that Mr. Sakamoto is great. He was changing the earth for landmine place. I think it's great.（Yさん）

F 卒業論文としてMy Dream、My Opinionを書く

２０１４年２月、中学校３年間で学んできた総まとめとして、卒業論文の執筆（My Dreamを全員、My Opinionを有志生徒で）を課した。時間は約３時間。入試、卒業前の超多忙な時期だけに、生徒にも教師にも大きな負担にならないようにし、しかもMy Dreamを全員が書けるように、パターン（Opening, Body, Ending）を確認し、例文を示して試みた。

（１）▯ 教師の例文

教師は４つの例文を用意した。①My Dream（やや深いバージョン）、②My Dream（書きやすいバージョン）、③④My Opinion。ここでは①と③を紹介する。

①▯My Dream Hello, everyone. I will talk about my dream. I want to be a climber in the future. I have two reasons for it. / First, I like mountains very much. There are many beautiful mountains in Japan. Second, I will visit some foreign countries. I hope to climb mountains in Switzerland, France and New Zealand. / I will study at a university from next April, but I will find time to go to the mountains. I will do my best to be a good climber in the future.
③ Hello, everyone.I will talk about *manabiai gakusyu*. I think our school should continue *manabiai gakusyu*./ I have two reasons for it. First, *manabiai gakusyu* is very good for students. Students can ask and teach each other. It is good for their learning. They become very friendly too./ Second, our school has become a very good one through *manabiai gakusyu*. Students had many kinds of troubles six years ago. We will graduate from our school in March. But I hope our school will continue *manabiai* and become a better one. Thank you very much.

（２）▯ 授業の進め方

①▯ 単語学習（教科書Ｐ103、104、巻末資料⑨）
②▯ Essayの書き方確認（Opening, Body, Ending）
③▯ 例文の学習
④▯My Dream下書き執筆（グループの全員が書けるように協力し合う）
⑤▯ 教師・ALTのチェックと清書
⑥▯ My Dreamが終わった生徒は、My Opinionの執筆
⑦▯ 清書した後、廊下に掲示して交流

（３）▯ 取り組みの様子

忙しい時期で、重みのあるテーマではあったが、ほぼ３時間の授業で全員がMy Dreamを完成させることができた。また３６人の生徒（96人中）が多様な内容のMy Opinionを執筆して提出した。予想以上の提出率であり、内容的にも読み応えのあるものが大変多かった。やはり自己表現は楽しい。生徒と対話ができるし、生徒のことを知ることができる。

３年生の全員が英語でMy Dreamを書いて卒業していった意義はとても大きいものがあると考えている。準備にはかなり神経を使ったが、取り組み過程としてはそれほど大きな負担もなく、全員が書けた理由として、次のことがあげられるだろう。

①作文練習（Essayの書き方）を積み上げてきたこと。 ②書く形式と例文を示したこと。 ③「My Dreamを全員が書く」という目標の下に、グループ・クラスで援助し合ったこと。 ③▯ 友達同士の学びあう、支えあう関係ができていたこと。ケアし合う関係ができていたこと。 ④教科外、学年の取り組み、その他の学習により、生徒たちが「書く内容」を持っていたこと。▯

（１）▯ 生徒の作品の中から、原文のままで紹介する。

My Dream Ｙさん Hello, everyone. I will talk about my dream. I want to be a farmer. I have two reasons for it. First, I like nature very much. And I want to do a job which has some connection with nature. Second, I want to eat vegetables I make. Also, I want many people to eat vegetables more. I will do my best to serve the good and safe vegetables to many people. Thank you.
My Dream Ｕさん I want to be a Korean interpreter in the future. I have two reasons for it. First, I like Korea. There are many wonderful places in Korea. Second, I want to speak with Korean people. I thought so when I watched Korean dramas. I will study at a high school from next April. So I will do my best to be a good Korean interpreter in the future. Thank you.

The importance of schools　Ｏ君

I think school is very important. I have two reasons.

First, we will have many conversations with many kind of people in society, so we must learn it. To go to school makes many students social. Schools are very perfect places for students to learn it. Second, I think we can learn other things.

To go to a school helps our future. Why don't we enjoy going to school together?

My Opinion　Ｋさん

I think that we should know about environmental problems. I have two reasons.

First, we have a lot of problems. So, I think we can start doing many things. For example, we can stop using cars. Second, it is useful for us to know many problems. We have to change the earth in the future. So we must know about the earth.

I think these problems are very important.

Forever the earth　Ｓさん

Hello, I'm going to talk about my opinion. We must save the earth. Very bad events are happening now. The earth has a problem that is global warming. We learned about them at school. One of teachers said, "There is not a light future for you." I was very shocked by hearing these words. Why can't we have light future? So, I thought about them very hard. And I understood two things for it.

First, we had a big problem in my country. About three years ago, we had a big accident in Fukushima. A lot of uranium was leaked. Many people can't go back home even now.

Second, Japan is an island country. The day will come when Japan goes under the sea. If it happens we will become refugees. Where is our new country? I think there is not ground which all Japanese can live with.

I want to save the earth. I'm for and against atomic energy. Because, if we stop using it, we have to use more fossil fuels. It is bad for the earth. And it helps global warming. But there are many people who are working there. However, atomic energy is very dangerous. So, I can't decide what we should do.

I don't want to lose many animals and nature. To think of the earth is to live together. I love the earth. We can change our future by ourselves. We should do something to the earth. I hope the earth can last forever!

3　実践のまとめと今後の課題

（１）以上、紙数の関係で限られたものになったが、子供達が繋がり、視野を広げ、国際的な課題についても思考を深める等の人格形成と、4技能を含めた英語学力の向上の両立を目指す実践を紹介してきた。特に表現力（発信力、内容）を高めることを目指した実践でもあった。

（２）内容のある教材を協同的に学ばせ、人格形成と学力形成の両立を目指すからこそ、将来英語をあまり使わないとも考えられる生徒も含め、全員が学ぶ「国民教育としての英語」の意義があると言えるだろう。

（３）協同的に英語を学び、ペアやグループでの援助のし合い等もふくめてこそ、全員が学びに参加でき、学力も高めていけるだろう。

（４）筆者の授業を3年間受けてきた生徒の声を３つだけ紹介し、考察の一手段にしたい。「学び合い学習（協同学習の生徒用の言葉）では、『自分がわかる』だけでなく、『人に教える力』が伸びるので良いと思う。人にもその知識を分けられる」（Ａさん）。「英語は苦手だから学び合いにしてくれるとすごくありがたい。一人だとできないけど、班のみんなとならできる」（Ｂ君）。「授業では、英語だけでなく、戦争の悲惨さや環境問題、人種差別などについても学べて良かった」（Ｃさん）。

（５）今回は自分の実践を紹介しながら、「協同的学びの質を考えたが、今後は他の実践者の取り組みを分析しながら、学びの質を考えていきたい。

参考文献

１）江利川春雄（2012）『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店(6)

２）根岸恒雄（2013）『英語教育4月号』大修館書店

３）佐藤学（2014）講演資料「学びの共同体　課題と改革」

４）ノディングズ，ネル（1992、邦訳2007）『学校におけるケアの挑戦』

５）中学校学習指導要領（2008）

６）江利川春雄（2012）ブログ「希望の英語教育へ」（9月26日）から引用

７）佐藤学（2014）同上

８）胡子美由紀（2015）講座「協働学習とＴＥＥで生徒を英語大好き、アクティブにする授業マネジメント」

９）根岸恒雄（2012）『協同学習を取り入れた授業のすすめ』（208-209）

10）吉田友樹（2015）報告「協同学習の実践と効果―英語嫌いと向き合い、スローラーナーに寄り添う」新英語教育研究会全国大会

11）胡子美由紀（2015）同上